

ネットワークカメラ アナログ監視のリプレースが本格化

急成長を続けてきたネットワークカメラ市場が転機を迎えている。これまで成長を牽引してきたモニタリング市場の開拓が一段落。一方で、アナログ監視システムからの置き換えが本格化しつつある。

文 坪田弘樹 本誌)

これまで急拡大してきたネットワークカメラ市場に「踊り場」の到来を予見する声が少ない。いわく、「07年度下期から市場は冷え込み気味」「08年度は伸び率がかなり下がるのではないか」というものだ。

景気後退の影響は、もちろんある。投資削減のターゲットとなりやすいのはセキュリティ関連製品の宿命だ。

しかし、要因はそれだけではない。本稿では、現在ネットワークカメラ市場に起きている変化と、さらなる成長に向けた各メーカーの取り組みを追っていくことにする。

重み増す「販売店の提案力」

ネットワークカメラが急激に出荷台数を伸ばしてこれた最大の要因は、既存のアナログ監視市場とは別に、新たな市場を開拓してきたからである。SierやNierがネットワークカメラを武器に切り開いていった「モニタ

リング市場」だ。

映像を漏らさず確実に録画するための信頼性、死角が発生しないようなカメラの設置、視野角の調整ノウハウといった要素においては、製品の質でも、販売店のスキル面でもアナログ監視システムには及ばない。だが、遠隔地からのモニタリング、さらには多数の拠点を一括で監視するといった新たなニーズを掘り起こしたことで、市場は急拡大した。

その状況に変化が起き始めている。国内トップシェアを誇るパナソニック コミュニケーションズ(PCC)のコミュニケーションネットワークカンパニー、国内マーケティンググループ・システム営業1チームの寺内宏之参事は、次のように語る。

「積極的に提案・売り込みをしている販売店は従来通りかなりの勢いで伸びているが、それ以外の販売店では前年並みあるいは売上が減少

しているところも出てきている」

モニタリング市場の成長は緩やかに、昨年ごろから徐々に「ディーラーの提案推進力に負うところが大きくなっている」と同氏という。

ネットワークカメラの弱点

踊り場から抜け出し、さらに成長するためには、何が必要か。

本格的にアナログ監視システムの置き換えを狙い、さらにネットワークカメラの特性を活かして新市場を開拓していく。それが今後の成長エンジンとなりそうだと(図表1)。

当然、製品自体もそれが可能な性能を備え始めている。最新の製品トレンドは後述するが、ここではまず、アナログと比したネットワークカメラの弱点を整理しておきたい。

アナログからネットワーク型への移行を妨げている大きな要因は、カメラおよび記録装置の相互接続性だ。

アナログカメラは現状、ほぼすべての製品で規格が統一されており、どのメーカーのカメラとレコーダーであってもコードをつなげれば映像が映り、録画できる。この簡便さを、ネットワークカメラは実現できていない。映像系のインテグレーターがネットワークカメラの取扱いに二の足を踏む最大の要因がこれだ。

だが、この課題を解決するための動きも出てきている。

08年5月、アクシスコミュニケーショ

ンズ ABとボッシュ・セキュリティ・システムおよびソニーの3社が行った提携がそれだ。カメラ、エンコーダー、ビデオ管理システム等の関連製品における相互通信を規定した標準規格が存在しない現状を鑑み、新たな標準規格の策定、インターフェースの統一化を目指そうというものだ。

互換性を確立することでアナログからの移行を促進。統一規格ができれば、サードパーティによるソフトウェアやデジタルビデオレコーダー(DVR)等の開発も容易になる。こうした取り組みと平行して「アナログにない価値」を武器に監視市場を攻めていく。これがネットワークカメラ販売の今後の方向性となるだろう。

では、ネットワークカメラならではの価値とは何か。最新の製品トレンドとともに見ていこう。

浸透する「メガ」の効果

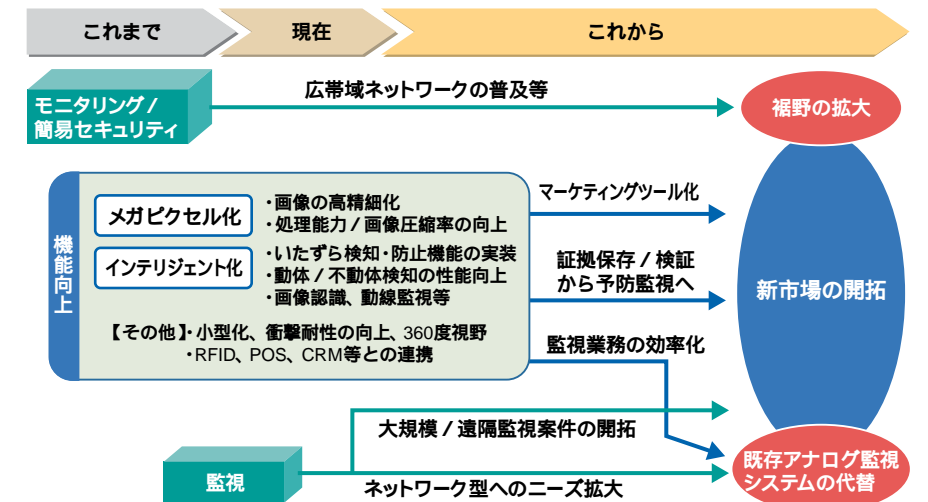
機能強化のうち、最もわかりやすいのが画質の向上だ。中でも進化が著しいのが画像の高精細化である。これまで主流だったVGAサイズ(640×480ピクセル)の4倍となるSXVGA(1280×960)、SXGA(1280×1024)画像が取得できるメガピクセルカメラの発売が相次いでいる。

前回(07年12月号)の商材研究で



アクシスコミュニケーションズの車載用小型ドームカメラ「AXIS 209FD」(左)とH.264対応ドームカメラ「AXIS P3301」

図表1 ネットワークカメラ市場の進展



も述べた通り、この傾向は昨年から顕著になってきた。今年はラインナップがさらに増加。その利点は、従来のVGAカメラでは不可能だった「人物やモノの特定」が可能なことだ。4CIFサイズ(704×576)、約40万画素相当の解像度であるアナログカメラとの差は大きい。このメガピクセルカメラの導入が進むとともに、従来の監視システムにはなかった新たな活用法、ニーズが生まれてきている。

「従来の監視カメラの目的は、人の出入りを確かめることだったが、現在では『誰が何をしているか』を特定したいという要望が強くなっている」と話すのは、パナソニック システムソリューションズ ジャパンの営業本部

商品マーケティングセンター、AV&Sグループ・シナプスチームの萱野実チームリーダーだ。

同社は今春、ハイエンド層をターゲットとした「i-pro(アイプロ)」シリーズの新ラインナップを発表。そのコンセプトは「メガピクセルの標準化」だ。従来より低価格なメガピクセルカメラを発売し、高精細カメラの活用領域を拡大する方針を打ち出した。

「DG-NP304」や「DG-NF302」といった新製品は他にも、逆光補正機能の強化、フォーカス調整の簡略化などの機能向上が図られているが、萱野氏によれば、ユーザーおよび販売店からは「やはり画像の精細さに関する反響が強い」という。

実際の導入例をみても、セキュリティ用途ではなく、内部統制を目的としたものが目立つ。金融機関においては、行員が扱っている紙幣や証券等の種類を見分ける。食品メーカーでは製造工程における異物混入をチェックする。運送業では、スタッフの荷抜き監視に使われている例もあ



パナソニック システムソリューションズのメガピクセルカメラ「DG-NP304」(左)と「DG-NF302」